
MAD LOVE

カデツェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M A D L O V E

【Nコード】

N 9 6 6 9 T

【作者名】

カデツエ

【あらすじ】

魔理沙×ヤンデレっ娘なお話集。

ヤンデレ、百合、微グロな表現があるので、苦手な場合は急いで逃げてください。

フランドール編を手直しました。

ただいまアリス編連載中。

第一章 憂鬱な日

「退屈だ」

フランは唐突に呟いた。しかし私は無視して本を読み続けた。

「退屈だ退屈だ退屈だあ〜〜！」

呟くどころか思い切り騒ぎ始めた。いい加減五月蠅い。

「ちょっとフラン、静かにしてくれない？」

「たいくつだあー！暇だあー！つまらないー！」

私の注意も彼女は聞くつもりが無いらしい。やれやれ。いつもの事ながら呆れてしまう。

このまま騒がれるのも嫌なので仕方なく話を聞いてみることにした。

「どうしたっていうのよフラン。さっきから何で騒いでいるのよ？」

「……………」

いきなり黙ってしまった。何時もなら「お姉様がないー！」だとか「うちにいるの飽きたー！」とか言うのだが、珍しく口をつぐんでしまった。

はて、どうしたのだろうか？

「…どうしたのか言ってくれないと解決しようにも何も出来ないのだけど？」

もう一度尋ねてみる。

「…マリサが来ないの」

「……………はあ」

やれやれ、あの白黒の事か。私は思わず溜息が出してしまった。

いつもいきなりやって来ては、館を荒らしたり、私の大切な図書館の本を「借りてくぜ！」とか言って勝手に盗っていくような奴である。思い出すだけで憂鬱になる。

しかしこの娘はあの迷惑な魔女 正確には人間だが に恋愛

感情を抱いているらしい。(私には理解できないが)

待っているのに魔理沙はなかなかやって来ない。その寂しさを誤魔化そうとしたのが騒いだ原因だろう。

「今日も来るって言うてたのに……」

フランは涙目になってている。泣かれるのも面倒だ。

「……彼女が何をしているか見る事ならできるけど？」

「……本当!？」

これくらいしか良い方法が思いつかない。私はこゝろ
小悪魔の
事よ に水晶玉を取ってくるように言った。

「彼女の事を思い浮かべながら水晶玉を見つめるのよ」

「うん!」

「それじゃあ……」

集中力を高める。意外と疲れる魔法なのだが図書館で騒がれるよりは遥かにマシだ。

「……………?」

フランの事だから多少騒ぐと思っていたのだが、無言である。……
それどころか無表情だ。一体どうしたのだろうか?

私には彼女には何が見えているのかわからない。

「どうしたのよ?何が見えたって言うのよ?」

魔法の発動を終えた後、フランに尋ねてみた。しかし、「何も見えなかった」の一点張りで、そそくさと自分の部屋に戻ってしまった。

魔法の式に間違いでもあったのだろうか?正直納得いかないが静かになったので良しとする。

さて、久しぶりに魔力を結構使ったので疲れてしまったし、暇なので始めてみた書き物も思ったよりも面白くなかった。(もうやらな

い)

そんなわけでもう寝ることにする。おやすみなさい。といっても今は真昼なんだけど。

パチユリー・ノーレッ

ジ

追記

勝手にこれを読んでいる奴。とっとと元の場所に戻して、メイドに見つかる前に帰ることをお勧めするわよ？

第二章 回想

フランドールは暗い自分の部屋にいた。彼女の瞳は涙で濡れている。

嘘つき。かすれた声でそう呟いた。

パチユリーには何も見えなかったと言ったが、実際には見えていた。嫌というくらい鮮明に。自分との約束を忘れて、とても楽しそうに談笑する想い人と人形遣いの姿が。思い出すたびに涙がこぼれる。

「どうして…？何で…？」

そう言っつて自問自答を繰り返す。

ああ、なんだ。答えは単純じゃないか。あの人形遣いが悪いのだ。あいつがマリサを奪ったのだ。そういう結論に至った。

そうとわかれば話は早い。あの人形遣いがいなくなってしまえばいいのだ。ああ、そうすればマリサは私のものになる。マリサは私だけを見てくれる。そう思うだけでうれし涙が出てくる。

今はお姉様と咲夜は神社に出掛けているし、パチエは寝てしまった。館を抜け出すのは簡単だ。

「ふっ…、ふふ…。あはははははははははははははははははははははははははははははははははははあ！！」

フランドールは笑いながら館を飛び出していった…。

? ?

第三章 頼み事

3日前。

魔法の森、アリスの家。

「…で？あなたの用件は結局なんなのよ？」

アリスは呑気に紅茶を飲んでいる魔理沙に尋ねた。

「ん？…ああ！忘れてたぜ」

やれやれ。いきなり押しかけて来たくせに用件を忘れるとは。ま

あ、いつもの事だが。

「お前に頼みごとがあつたんだ」

「…なによ？」

「人形を作つてほしいんだ」

「人形を…？」

珍しい用件だな、とアリスは思った。

「一体何の？」

「私とフランのだ」

「べつにかまわないけれど…。なんで？」

「いや…、あいつあんまり紅魔館から出られないだろ？それで少しでも暇つぶしにでもなるように、誕生日プレゼントにでもしようと思つてさ」

「…吸血鬼に誕生日とかあるのかしらね？」

「そんな細かいことはどうでもいいんだぜ」

「あんたねえ…」

「それじゃ、よろしく頼むぜー！」

「あ、ちよつとー！？」

魔理沙は用件を言い終わつてすぐに飛んで行ってしまった。

「まったく…、片付けぐらいしていきなさいよ…」

彼女が飛び去った方向を見てアリスは嘆息した。

？

第四章 嵐の前の静けさ

そして現在、パチュリーが魔法を使う少し前。

「よおアリス。人形は出来たか？」

魔理沙がアリスの家に飛んで来た。

「…いくらなんでも気が早過ぎない？」

「あれ？3日って言わなかったか？」

「言っていないわよ」

自分で言ったかどうかくらい覚えていられないのか。まあ、これもいつものことなのだが。

「うーん、今日渡そうと思ったんだがなあ」

「今日じゃないといけないの？」

「今日が誕生日だからな。言わなかったっけ？」

だから言っていないってば。これでも魔理沙より記憶力がいいとは思ってる。

「仕方ないわね、あと2時間くらいで完成するから待ってなさい」

「おお！本当か？結構出来上がったのか？」

「まあ暇だったしね」

私、友達少ないし　と言いかけた。危ない危ない。

「それじゃ、紅茶でも飲んでくつろぎながら待ってるぜ」

と言つて魔理沙は私の家のリビングに上がりこんだ。

「…家主の許可をとるつもりはないのかしらね？」

2時間後。

「はい、出来たわよ」

「おお！いい出来じゃないか！」

魔理沙に人形を手渡す。金髪で白黒の服の魔女と紅い服の吸血鬼。

我ながらいい出来だ。

もう少し早く完成すると思っていたが魔理沙と話しながら作っていたせいで余計に時間がかかってしまった。

それにしても…、人の家の紅茶を何杯も勝手に飲むのはどうかと思うのだが。

「ありがとうなアリス、それじゃあな！」

「待ちなさい。」

「うわっ。」

人形を帽子の中に仕舞って出て行くこうとする魔理沙の服を掴んで引き止める。

「…感謝する気があるなら片付けぐらいしていきなさい。」

「いや、その、フランとの約束の時間、過ぎちゃってさあ…」

「どのくらいよ？」

「そ…、その…、さ、3時間程…」

「……は？」

呆れた。私の家に着いた時点で、1時間遅れている。

「ああもう、いいわよ。早く行きなさいな。」

「す…、すまない！礼はいつかちゃんとするぜ！」

と言つて、紅魔館に向かって大急ぎで飛んでいった。やれやれ。

3時間も遅れたのだから、きつと図書館の魔女が相手でもしているのだろう。さずかに同情する。

さてと、人形作りも終わつたし、天気もいいことだから、外でゆつくりとお茶でもしようかしらね…。

？

最終章 すれ違いの果て

魔理沙は紅魔館の前までやって来ていた。

「さすがに遅れ過ぎたよなあ…」

フランの奴、怒ってなければいいんだけどなあ…と思いつつ、居眠りしている門番を無視して館に入った。

「さてと、どこにいるかな…」

とりあえず図書館に行ってみる。たぶんパチュリーが相手をしているだろう。

結論から言うと、図書館にフランはいなかった。しょうがないので本の整理をしていた小悪魔を捕まえて問いただしたところ、「妹様なら自室に戻られました」だそうだ。

「これなら最初から部屋に行けばよかったです」
でもせっかく来たのだから、何冊か本を借りていこう。小悪魔が何か言っていた気がするが無視した。

「そういえば、今日はレミリアも咲夜も見かけないな」
フランの部屋に着いてからそのことに気づいた。ここにもフランはいなかった。

ということはみんなで神社にでも行ってるのか？

「まったく、約束しといて出掛けるなんてひどいぜ」

…まあ3時間も遅れる私が悪いんだが。

仕方ないので神社に寄ってから自分の家に戻ることにしたが…。

「うわっ、なんだこりゃ」

窓から出て行くこうとして、窓ガラスがおもいつきり割られていることに気づいた。まさかフランの奴、こっから出てったのか？

レミリア達が自分をおいて神社に行ってしまったから、追いかけて窓から飛び出した。ということだろうか。

「…考えても仕方ないか」
フランに会ったらちゃんと謝ろう。
そう考えながら窓から出て行った…。

フランドールは人形遣いの家の前までやって来ていた。
人形遣いは家の外で紅茶を飲んでいた。マリサはもういない。
「ん？」

人形遣いがこちらに気付いた。

「あれ？あんたは…。なんで日傘も差さずにこんなところに…」

「死ね」

「え…？」

人形遣いの『目』を右手に移動させ、思い切り握り潰す。

それと同時に人形遣いの身体は肉片となって飛び散り、あたりは
血で真っ赤に染まった。

「ふっ…、ふふふ…」

コレデ邪魔者ハイナクナッタ。

ふと、自分の身体が人形遣いの返り血で汚れていることに気
づいた。

…。
…。
…。
…。

「うーん。神社にもいないとはなあ…」

魔理沙は森の中を歩いてアリスの家に向かっていった。

神社にはレミリアと咲夜はいたが、フランはいなかった。一体ど
こに行ったのだろうか？

「今日中に渡したかったんだがなあ…」

帽子の中にしまった人形を取り出して眺める。誕生日プレゼント

と言っではいるが、実際には誕生日なんかわからないので、フランと初めて会った日を誕生日ということにした。そして今日、プレゼントを渡そうと思ったが、結局フランは見つからなかった。

仕方ないので明日渡すことにした。せっかく一日余裕があるのだから、自分の家でパーティーを開くことにした。フランだけじゃなく、パチユリーやアリスも一緒に。

そのことをアリスに伝えるために、彼女の家へ、料理に使えそうな木の実やキノコなどを探しつつ、歩いて向かっている最中である。フランとパチユリーは明日連れて来るつもりだ。

「それにしても…、本当にどこ行っただらう…」
明日には帰って来るといいんだが…。

魔理沙はアリスの家の近くまで着いた時、誰かが家の前に立っていることに気づいた。

「あれは…」

紅い服に金髪、見覚えのある不思議な形をした羽。

「フランじゃないか！おーい！」

急いで近付こうとした。が。

「うわっ!？」

グシャッ。何か岩の様な物につまづいて転んでしまった。

「つつ。なんなんだこれ……ツ!？」

岩を拾い上げた瞬間、戦慄した。

それは岩ではなく、人の頭だった。金髪でカチューシャをしていて、しかも顔はアリスの

「うつ、うわあああああああああああ！」

思わず叫び声を上げて、尻もちを着いてしまった。

「うつ、嘘だろ……」

まわりをよく見渡すと、頭以外にも腕や脚、
×××に×××…。
「…ッ!ゲホッ!!ガハッ!!オエエエ…」

あまりのむごたらしさに嘔吐してしまった。

「いものー!!」

「フ…フラ…ン…」

魔理沙は誤解を解くために、もう一度話し掛けようとした、が。
「偽物の分際で私の名前を呼ぶなあああああああああっ!!
!…!!」

ゴキツ。フランドールは容赦なく魔理沙の首をへし折った。魔理沙の表情は絶望と悲しみに満ちていた。

「ハア…、ハア…、早く、本物のマリサを見つけ…」

ドサツ。絶命し、力が抜けていく魔理沙の頭から帽子が外れて、中から何かが落ちた。

「え…?何…これ…!?!」

フランドールはそれを見て驚愕した。帽子から落ちた衝撃でこわれた魔理沙に似た人形と、自分自身に似た人形、そしてカード。そのカードには、『フランへ 誕生日おめでとう!!これからもよろしくな!! 魔理沙より』と書かれていた。

「う…嘘…」

フランドールは理解した。魔理沙が来なかったのは、人形遣いに頼んだ人形の完成を待っていたからで、約束のことを忘れていたわけではなかったことに。それどころか、自分の為にプレゼントを用意していたのだ。

「い…いや…」

つまり、さつき殺したのは本物の

「いやあああああああああああああああああああああ
あ!…!!」

悲劇の後に残ったのは、バラバラになった人形遣いと、こわれた金髪で白黒の服の魔女。そして紅い服の吸血鬼の、嘆きの叫び声が木霊するだけだった…。

?

エピソード

きょうからあたらしいおにんぎょうさんが、わたしのおへやにやって来た。きんぱつで、しろくろのおようぶくのおにんぎょう。こわれちゃってしゃべれないけど、この子はわたしのお気に入りに。これからまいにち、ずうくといっしょ。ごはんも、あそぶのも、ぜえくんぶぜんぶ。だって、わたしのダイスキなおんなのこのすがたをした、大きなおにんぎょうなんだもの…。そうでしょ？ マリサ…？ わたしたち、とってもなかよしだものね…。

第一章 人形遣いと白黒（前書き）

おひさしぶりです。

いやー、日常パートってきついわー。

第一章 人形遣いと白黒

妖怪ですら足を踏み入れる事が少ない魔法の森、そこに建っている小さな洋館。

「おお、このクッキー美味しいな」

「褒めたって何も出ないわよ」

「ちえっ」

この館に住んでいる人形遣いのアリス・マーガトロイドは、友人である霧雨魔理沙と、庭でお茶会を楽しんでいた。

「なあ、紅茶もう一杯淹れてくれないか？」

「たまには自分でやりなさいよ」

「アリスが淹れたのが好きなんだよ」

「な…、し、仕方ないわね、特別よ」

二人はいつも通りに談笑していたが、魔理沙の他愛のない一言にアリスは赤面し、それを悟られないように、そそくさと館のキッチンに向かった。

「ま、まったく…、よくあんな事平然と言えるわね！」

お湯を沸かしながら、アリスは独り言を呟いた。

魔理沙が面と向かって「好き」と言った事に 紅茶が、だが

アリスは悶々としている。

アリス・マーガトロイドは霧雨魔理沙に対して好意を抱いている。表面上は冷たく接しつつも、本心では、常に一緒に居たいと思っているのだ。

「わ、私に向かって「好き」だなんて…、あーもう！！バカバカバカバカ！！」

もう一度云うが、飽くまで「紅茶が」である。

「本当に…、っ！おっととと」

お湯が沸いたところで、アリスは我に返った。

「はい、どうぞ」

「お、サンキュー」

魔理沙は読んでいた本を閉じ、アリスが持ってきた紅茶を飲み始めた。

「これ、何の本？」

何を読んでいたのか気になり、アリスは本を手にとって読んで見ようとした。

「だ、駄目だ!!!」

しかし、魔理沙に目にも留まらぬ速さでひったくられてしまった。こんなにも慌てた彼女を見たのは、アリスにとっては初めてだった。そんな反応を返されると、余計に気になってしまうものである。

「ねえ、一体何なのよ？」

「そそそんな事より、そういえば今日は頼み事があって来たんだ！」

「頼み事？」

無理矢理話題を変えられてしまった。アリスは、何故、魔理沙が頑なに本を見せたくないのか非常に気がかりだったが、今はその「頼み事」の方が彼女にとって重要だ。

「…あんまり面倒な事を言われると困るのだけど？（何！？何！？何でもするよ!!!）」

いつもと同じく、冷たく接しているが、本心はやはり、何でもやるつもりでいる。

「おお!!!聞いてくれるか!!!」

「…で、何？（あああ!!!笑ってる魔理沙可愛い）」

「今度フランの誕生日…、ああ、吸血鬼にそんなのがあるかわからないから、私が勝手に決めただが、そのプレゼントに、あいつと私の人形を作ってほしいんだ」

「フランの為に…?」

「そうだ」

「…いいけど」

「そうか!..よろしく頼むぜ!..おっと、そういえばちょっとした用事があったんだ。じゃあな、アリス」

「あ…」

用件を言い終わるとほぼ同時に、魔理沙は箒に乗って飛び立ち、その後ろ姿を、アリスはひどく落胆した様子でしばらく眺めていた…。

第一章 人形遣いと白黒（後書き）

アリスのセリフを書くのがいろんな意味できつかったです。

第二章 回想（前書き）

また回想ですか？

第二章 回想

魔理沙が飛び立ってからしばらくした後、アリスは自室で人形作りを始めた。しかし表情は暗く、どこか遠くを見ている様で、全く集中できていなかった。

彼女は、魔理沙の頼み事がフランの為の内容だった事に、ショックを覚えた。魔理沙以外の為に時間を割いて苦勞をせねばならない事が、嫌で仕方がなかったが、彼女の頼みなのでやらないわけにはいかないというジレンマに陥っていた。

率直に言えば嫉妬しているのだ。魔理沙に想われているフランの事を。

「ハア……」

思わず、ため息がでた。

「考え過ぎかもしれないわね……」

魔理沙はただ単に、友人へのプレゼントの作成をアリスに依頼しただけに過ぎない。別に特別な意味もないはずだ。

アリスはそう思い込む事にし、黙々と作業を続けた。しかし、だからといって彼女の悩みの種が尽きるわけではないのだ。

「痛っ……!」

縫っている最中に、左手の人差し指を針で刺してしまった。いつもならあり得ないミスである。

「えっと……絆創膏は……」

慌てて絆創膏を取り出し、傷口に貼り付けた。

「もう……寝よう……」

急にやる気が失ってしまったので、アリスはふて寝する事にした。気付けば辺りはすでに暗くなっており、寝室のベッドに倒れこむと同時に、強烈な眠気が襲ってきた。

「そついえば、明日は人里で公演があったわね……」

まどろむ意識の中で、明日の予定を思い出したが、寝坊しないよ

うにしよう、とだけ意識して、そのまま眠りに就いた。

第三章 無意識少女との邂逅（前書き）

無意識なう

第三章 無意識少女との邂逅

「…そうして、王子様と王女様は結婚し、いつまでも幸せに暮らしましたとき。めでたしめでたし」

パチパチパチパチ。辺りから子供達の拍手と歓声が鳴り響いた。

今日、アリスは人里にやって来ていた。寺子屋で教師をやって
いる慧音に、人形劇を生徒達に見せてやってほしいと頼まれて、今
丁度終わったところである。

「すまないな、無理に頼んだりして」

片付けている最中に慧音が挨拶しに来た。

「別に問題ないわ、こういうの、嫌いじゃないし」

実際、演じている最中は昨日の事も忘れられて楽しかったし、家
で独りきりよりもずっとましだった。

「それじゃあ、これで失礼するわ」

「ああ、よかつたらまた宜しく頼む。子供たちもとても嬉しそうに
していたのでな」

「ええ、喜んで」

そうしてアリスは慧音と別れた。

アリスは歩いて家に帰ることにした。飛んだ方が早く着くのは明
らかであったが、なんとなく、飛ぶ気にならなかつたのだ。しかし、
歩みを進めていくうちに、再び昨日の出来事が頭を過る。余計
な思考が、考えたくもない可能性が、次々と浮かんでいく。

魔理沙にとって、私はただの友人でしかないのか？

実は私以外の誰かと想い合っているのではないか？

しかしそれは単なる私の妄想でしかないのではないか？

そのような考えが堂々巡りの様に頭の中で繰り返された。くだら

ない。

「はあ……あれ？」

長い時間思考を巡らせて、無意識で歩いていたせいか、我に返ると、見知らぬ道に出ていた。仕方ない、さっさと飛んで帰ろう。そう思った刹那。

「あああら、そのお姉ちゃん？こんな所で何してるの？」

「!？」

後ろから声をかけられた。反射的に振り返ったが誰もおらず、なんの気配もなかった。いや、いた。意識していないと、陽炎の様に揺れて消えてしまいそうな少女が。アリスの記憶の中に、そんな能力を持つ知り合いは一人しかいなかった。

「あんたは……地霊殿の……」

「ん？私のこと知ってるの？」

地底の奥深くに存在する旧地獄の中心に建っている地霊殿。その主人である古明地さとの妹、それが今アリスの目の前にいる古明地こいしである。無意識で行動しているため、彼女が現れることはめったにない。アリスは魔理沙に貸した人形を通して彼女のことを知ったため、こいしの方はアリスのことを知らない。

「ま、そんな事はどうでもいいや。私が興味あるのはあなたの無意識だもの」

「は……？」

「あなたが無意識に考えている事なんて、私にはお見通しなんだから」

こいしは覚の持つ器官、「第三の目」を閉ざしているため、心を読む事ができない。そのはずなのにまるですべて見透かしているような言い草である。

「私にはわかるよー？あなたが無意識のうちに思っている感情がー」

「なん…なのよ……」

こいしの怪しげな雰囲気、アリスは後ずさりした。それに構わ

ず、こいしは続けた。

「あなたの無意識には、ものすごく黒い感情が渦巻いてるわ。嫉妬、憤怒、孤独、愛欲。それを自我あなたに教えてあげたいの？」

「け…、結構よ…。それしか用事がないなら、私も帰るわ…」

「だ〜め」

「な…!?!」

彼女を無視して帰ろうと、振り返ると、何故かすでにこいしが回り込んでいた。

「貴女は興味なくても、私はすごく気になるの？まるで誕生日にもらったプレゼントの箱のように、一体中に何が入っているのか？」

「も、もうやめて!!」

アリスは、こいしの言っている事を聞いていると、おかしくなっ
てしまいそうな気がして耳をふさいだ。しかし彼女の声は直接頭の中
に語りかけてくる様に鮮明に聞こえた。

「あ、そうだ！自我あなたに無意識もっぴとりのしがいんのお話を聞かせてあげるわ？」

「な、何をする気…?」

「こつよ!!」

本能「イドの解放」

「あ
」

アリスの意識は奥深くまで落ちて行った。

第三章 無意識少女との邂逅（後書き）

こいしちゃんかわいいよこいしちゃん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9669t/>

MAD LOVE

2011年12月10日23時53分発行